
夜兎と人の血

獅兎羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜兎と人の血

【Nコード】

N5184Z

【作者名】

獅兎羅

【あらすじ】

万事屋銀ちゃんのオーナー坂田 銀時。

そんな、彼の元に一人の青年がやってくる。

そして、高杉が江戸に・・・。

神威が・・・。

桂が・・・。

辰馬が・・・。

新八と神楽が・・・。

第零訓 自分の血（前書き）

初の投稿です。

獅兔羅っです^^

神威、高杉、銀時バカです。

神威と高杉が出すぎるかも・・・。

※ 残酷な描写がある話もあります。

第零訓 自分の血

俺はなんでここに存在してしまったんだろう。

攘夷戦争に出て知った。

俺の真実を・・・。

天人を倒すために参加したのに・・・。

俺の血が楽しんでいる・・・。

殺すことを楽しんでいる。

心から・・・。

楽しんでいやがる・・・。

殺すことを楽しむために参加したんじゃない・・・。

なのに、なのに・・・。

俺の血は一体何なんだ・・・？

そこで知った俺の出生の秘密を・・・。

俺は・・・。

「夜兎」

だったんだ・・・。

人間と夜兎の・・・

子供だったんだ・・・。

俺は生まれてきたことが間違いなんだ。

俺の血は

穢れている・・・。

第零訓 自分の血（後書き）

どうでしたか？

いきなりオリキャラ出しちゃいました・・・。

次はどうなるかな・・・。

感想よろしく願いますへへ

第一訓 お母さん発言は20歳から(改)(前書き)

2話目書けました。
結構つかれた。

第一訓 お母さん発言は20歳から（改）

「新八、出勤しました。」

いつものように朝から新八の声が響く。
ここは万事屋銀ちゃん。

「神楽ちゃん、起きて。」

新八は押入れを開ける。

「・・・あと5時間・・・。」

「そんなこと言わずに早く起きて。」

新八はそう告げ、隣のふすまを開ける。

7

「銀さん、早く起きてください。」

「もう少し寝かせろよ。今日はお天気お姉さんもないんだから・・・。」

新八はため息をつく。

「はぁ。銀さんもいい大人なんだから一人で起きれるようにしてください。」

「んなもん知るか。つーか新八、お母さん発言は20歳になってからだろ。」

「そうアルヨ。だからお前は新一じゃなくて新八ネ。なんだよぱちって。」

そんなこと言うのはいつの間にか起きてきている神楽だ。

「そんなもんは原作者に言え！僕に言われてもわからないよ。」

「なに？ワンパークの人にいうの？」

と銀さん。

「ちげーよ。銀魂のだよ。銀魂の。ワンパークの人に言ったら全然わからないでしょ！」

「んなもん分かんないよ。もしかしたら知ってんじゃねーか。」

「そんなわけあるか！！」

「つーか騒いだせいで目が覚めちゃったよ。どうすんだ。」

ダルそうな眼をした銀時が言った。

「どうすんだじゃないわー！」

新八のつつこみ。

「わーったよ。起きりゃいんだろ。」

あれこれあったが新八は銀時と神楽を起こすことに成功した。

「って、これなんのミッション？作者さん。」

第一訓 お母さん発言は20歳から(改)(後書き)

どうでしたか？

新八ってこんなん？って思いながら書きました。

結構似てない・・・かも。

第二訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる（前書き）

第一訓、読んでみて・・・

メッサ読みにくい・・・。

すいませんでした。

第二訓からは少しか改善されました。

第二訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる

「暇だあゝ。依頼ねえーのか？」

銀時がぼやく。

「ぼやかないでください。大体いつも全然来ないじゃないですか。」

新八の正論。

万事屋Ⅱなんでも屋がこの万事屋銀ちゃん。

そのため、怪しがるのか・・・依頼はほとんどこない。

「仕方ないネ。私と銀ちゃん以外の従業員がダメガネだからナ。」

毒舌発言の神楽。

「依頼来ても大体僕しか働いてないよ、神楽ちゃん。」

「それが雑用の仕事アル。」

またも、毒舌発言の神楽。

「さっきと矛盾してる。」

と新八。

プルルルル、プルルルル。

「あっ電話アル。」

「お、依頼か？」

銀時は電話に出る。

「はい。万事屋銀ちゃんです。」

『外に出なよ。』

「はあ？」

『いいから外に来て。』

その声は男らしいが子供っぽく、声が高かった。

「オメーはいつてえ誰だ？」

『……』

プツ。

電話が切れた。

（なんだ今の……。）

「銀さん、誰からですか？」

「わかんねえ……。」

新八と神楽が顔を見合わせた。

（さっきの声どっかで……。）

銀時は玄関の方へ歩いて行った。

その後ろに新八と神楽も続く。

ガラララララ。

銀時たちが外に出ると屋根の上から人が降りてきた。
その人は傘をさし、赤と黒の着ものを着ていた。
神楽が驚いた顔をしている。

「銀さん、あの傘。」

銀時も驚いた顔を見ている。
前に居る人は夜兎の傘をさしていた。

その人は傘を上げる。
その顔は髪の色がオレンジで、眼の色が青かった。
これは完ぺきに夜兎の特徴とかぶっている。

「久しぶりだね。銀時。」

そう言った青年の顔を見ながら銀時はまだ驚いた顔をしている。

「忘れちゃった。じゃあこれ見たら思い出すかな？」

そう言うと青年は懐から兜割を取り出した。
それを見た銀時は何か思い出したようだった。

「おめーは……。」

第二訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる（後書き）

どうでしたか？

これからどうなる事か・・・
自分でも心配です。

感想、よろしくお願いします。

第三訓 監察はすげー（前書き）

第三訓までいきました。

今回は真選組中心でいきました。

沖田のキャラを作るのが大変でした。

第三訓 監察はすげー

「高杉が江戸に!？」

真選組の屯所に近藤の声が響いた。

「はい。俺らが仕入れた新たな情報です。」

「ほお。あの野郎、今度は何を企んでやがる。」

土方が呟いた。

「なんでも、攘夷戦争に参加していた人を探しているとか……。」
「攘夷戦争か……。旦那も参加してやしたよねィ。」

沖田が言った。

銀時は真選組と見廻組との争いの時に自分が白夜叉だとぼらしている。

土方が口を開いた。

「ああ。それも、桂や高杉に並ぶほど強かったという白夜叉だったらしいしな。」

そして、呟いた。

「後の有名どころは坂本 辰馬と戦場の獅子かあ。」

「坂本 辰馬は快援隊の隊長。でも、戦場の獅子って一体誰なんですかね？」

「さあな。まっ獅子なんて言うからけっこう強いだろーな。」

土方は言った。

「そう言えばその高杉。一人のガキを連れ歩いているらしい……。」

「ガキ……。」

近藤は呟いた。

「はい。なんでも夜兎の特徴とかぶってるらしいです。」

山崎は言った。

「夜兎な……。万事屋のこのチャイナも確か夜兎だよな。そこにいくのが手っ取り早いな……。」

「なっ、万事屋に行くのかよ？」

土方が嫌そうな声をあげた。

「俺もいやですよ。大体あのチャイナとなんか会いたくないですぜイ。」

沖田も嫌そうな声を出した。

「仕方ない。夜兎のことや、高杉のことを知ってんのは万事屋の奴らしかいないんだ。」

近藤がそう言うと、沖田も土方も承知したらしい。
ゴリラでも人望は厚い……。

「俺、ゴリラじゃないし。作者さん！」

第三訓 監察はすげー（後書き）

どうでしたか？

真選組のキャラは・・・

つくりづらい！！

でも、自分的にも真選組は好きだからこれからも色々出していきます。

第四訓 お金は必要なもの（前書き）

第四訓だよ。

銀さんと神楽と新八と・・・

あの青年が中心。

第四訓 お金が必要なもの

「銀さんの知り合いなんですか？」

万事屋に新八の声が響いた。

「まあーな。」

青年は髪をポニーテールにしている、ぱつと見、青年時代の土方ぐらい。

だが、神楽だけは警戒を解けきってないらしく、じつと青年のほうを見ている。

「俺、伊達 柚兔。歳は25。」

柚兔は笑いながら言った。

「なんで、夜兔の特徴を持ってるアルカ？」

神楽は警戒した目を浮かべながら言った。

「俺が夜兔だからだよ。完ぺきな夜兔じゃないけどね。」

「どういう意味アルカ？」

神楽は不思議そうな眼をしながら柚兔に聞いた。

「俺さあ、夜兔と人のハーフなんだよね。半分が人の血でもう半分が夜兔の血。」

「ハーフ!？」

新八と神楽が声をあげた。

「そう。まあ髪の色と眼の色、そして日に弱いところは夜兔譲り、人譲りってなにかわかんないけど、たぶんなんかあるんだろーな。」

銀時が口を開いた。

「つーか、なんでいんのよ？」

「いちゃだめ？」

「別にいいけどよ。」

「あの・・・ひとつ聞いていいですか？」

新八が言った。

「いいよ。なんでも聞いて。」

「じゃあ、柚兔さんはいつ銀さんに会ったんですか？」

柚兔は少し顔を曇らせたが、すぐ笑顔になり言った。

「攘夷戦争って知ってる？銀時とはそこで会ったんだ。」

「知ってます。20年前に起きた天人との戦の事ですよね。」

新八が言った。

「そう。まあ俺らが戦ったのは終わりごろだけだな。ヅラや晋助や辰馬ともそこで会ったんだよ。」

そう言う柚兔はどこかうれしそうだ。

「つーか柚、オメーここに泊るき？」

銀時が言った。

「まあね。つーことで、居候させて。」

「なに勝手に決めてんだ。」

「別にいいじゃん。居候ぐらいさあ。」

（柚兎さんって以外と・・・自己中。）

「つーことで、よろしく。」

「だから、勝手に決めんな！」

そこで新八が口を開いた。

「まあ、いいじゃないですか。僕、志村 新八です。」

「私は神楽ネ。夜兎アルヨ。」

「じゃあ、よろしく。神楽に新八。」

銀時が困った顔をしている。

「俺んところ、もう金がないんだけど・・・。」

「気にしない、気にしない。」

そんなことで夜兎と人のハーフの柚兎を居候させることになった万事屋銀ちゃん。

家計のほうは大丈夫なのだろうか・・・。

「大丈夫じゃないわ〜!」

第四訓　お金は必要なもの（後書き）

どうでしたか？

昨日の夜42巻読みました。

沖田と土方がカッコよかったです。

近藤はやっぱゴリラだね・・・。

感想よろしく。

第五訓 いつまでたっても変わらない（前書き）

第五訓 이었습니다。

お気に入り登録してください。方々ありがとうございます。
今回は万事屋と柚兔中心です。

第五訓　いつまでたっても変わらない

「おはようございます。」

次の日。

新八が出勤してきた。

「おはよう。」

「柚兔さんは起きるの早いですね。」

昨日から万事屋に居候している柚兔は朝から椅子の上に座っている。

「銀さんと神楽ちゃんはまだ寝てますか？」

「寝てるよ。銀時は相変わらず朝寝坊だなぁ。」

柚兔はどこか懐かしい感じで言った。

「昔から朝寝坊だったんですか？」

新八が聞いた。

「そう。戦時中もさ、戦争に遅れてくるは、会議に遅れるはで悩みの種だったんだよ。」

柚兔は呆れ顔で言った。

「おはようアル。」

神楽が起きてきた。

「おはよう。神楽ちゃん。」

「神楽、おはよう。よく眠れた？」

「ふぁゝ。寝れたアル。」

神楽はあくびをしながら言った。

「寝むそうだね。」

「大丈夫アル。こんなのお茶の子さいさいネ。」

柚兎はそう言う神楽を見ながらにこつと笑った。

「おはおう。」

銀時が目を擦りながら起きてきた。

「銀ちゃん、起きるの遅いアル。」

そう言う神楽。

「神楽が言えることじゃないでしょ。」

笑いながら言う柚兎。

そして、銀時に向かって言った。

「そして、銀時もさっさと起きる。もう大人だろ？」

「へいへい。」

そう言う銀時。

そのあと3人（新八を抜く）は朝ごはんを食べて、ボーっとしてい

た。

「暇だろ。」

「そうアルナ。」

ソファアの上でゴロゴロする銀時と神楽。
その時だった。

インターホンが鳴った。

「おっ、依頼か？」

銀時は玄関の扉を開けた。
そこに居たのは・・・。

「久しぶりですねィ、旦那。」

「税金泥棒。何しに來たんだよ。」

真選組の近藤、土方、沖田、山崎の4人だ。

「誰が税金泥棒だ。」

イライラしながら言う土方。

「で、何の用だ？」

「俺らが用あんのはオメーじゃねえ。あすここに転がってるチャイナ娘に用があんだよ。」

「神楽に？」

不思議そうな顔をする銀時。

「ああ。夜兔についてだ。」

転がっていた神楽とボーっとしていた柚兔が反応した。

「高杉のところに居る三つ編みのガキについてな・・・。」

（神威！）

第五訓 いつまでたっても変わらない（後書き）

どうでしたか？

真選組も出しました。

と、ここで・・・。

出てくる人の年齢など紹介します。

坂田	銀時	・	・	・	26歳
志村	新八	・	・	・	16歳
	神楽	・	・	・	13歳
伊達	柚兔	・	・	・	25歳
近藤	勲	・	・	・	29歳
土方	十四郎	・	・	・	26歳
沖田	総悟	・	・	・	18歳
山崎	退	・	・	・	25歳
桂	小太郎	・	・	・	26歳
高杉	晋助	・	・	・	25歳
坂本	辰馬	・	・	・	26歳
	神威	・	・	・	19歳
	阿伏兔	・	・	・	32歳

と、いう感じです。

感想よろしくお願いします。

第六訓　びっくり発言は驚くものだ。（前書き）

第六訓です。

今回は真選組と万事屋、柚兔中心です。

第六訓　びっくり発言は驚くものだ。

「ほお。あの高杉のところにねえ。」

真選組を中に入れたあと銀時が呟いた。

「そうだ。チャイナ娘、なんか知ってないか？」

そう言う土方の眼はいつもながら鋭い。

神楽は下を向いている。

その様子を黙ってみる新八と銀時。

それに、柚兔。

「知ってるアル。あの片目野郎のところに居るのは……私の兄貴アル……。」

「兄貴!？」

真選組が声を上げた。

なんとなく予想は付いていた銀時と新八はやっぱりなという顔をしている。

柚兔は少し驚いてる顔をしているが、笑顔は崩していない。

「オメー、兄貴が居たのか……。」

驚いた顔をする真選組に対し、下を向く神楽。

「神威とかいう奴だっけ……?」

そう言うのは柚兔。

その発言を聞き、新八、銀時が驚いた顔になった。
神楽も顔を上げた。

「柚兔。オメーなんで名前を知ってる？」

銀時は驚きまくっている。

「ここに来る2日前、晋助に会った。つか呼び出された。」
「はあ!？」

真選組と万事屋メンバーが声を上げた。

「てか、オメー誰ですかイ？」

沖田が聞く。

「俺は伊達 柚兔、25歳。」

「おい。高杉となんかあんのか？」

土方のその眼はさっきより鋭さを増している。

「俺はただ、晋助やヅラや銀時や辰馬の知り合いって事だけだよ。」

そのメンツを聞き、真選組は頭をフル回転させる。

「まさか・・・お前が・・・あの戦場の獅子か？」

その近藤の問いに対し、あっさり答えた。

「そうだけど。」

真選組が顔を見合わせる。

「晋助が呼び出したさいに、その神威ってヤローに会っただけ。以外に子供っぽいね。」

「お前が言えることじゃねえーだろ。」

銀時は柚兎に対し、冷静にツツコム。

「神威となんか話したアルカ？」

「うーん。あつ、俺が夜兎と人のハーフってことと、晋助らの知り合いつてことぐらい。」

その話を聞き、さらに真選組が顔を見合わせる。

「ま、この辺はさらっと受け流せ。」

銀時は真選組の空気を察し一言告げた。

「あとひとつ言っておく。あんま晋助を追い回すな。無駄死にするぞ。」

柚兎はあっさりそう告げた。

土方は柚兎の胸元をつかむ。

「お前、知り合いだからとか言う理由で庇ってんのか？」

「庇ってないよ。ただ俺はあいつが死ぬのを見たくない。」

それを聞き、さらにめが鋭くなる。

「もうひとつ言うと、誰も死んでほしくない。今のあいつの眼は復讐に走る哀れな獣の眼だ。今のあいつに立ち向かって勝てる奴なんか俺の知ってる限りで4人しかいねえ。」

その言葉を聞き、土方は柚兎の胸元を放す。

「その4人ってのは誰だ？」

「まずは俺。そして、銀時にヅラに辰馬だよ。」

土方はどう反応していいか分からなかった。

「ま、決闘になっても誰ひとり晋助を殺すことはしないね。」

そう言い銀時の方を振り向く。

銀時は目線をそらす。

「ま、いいさ。」

近藤が一言言い空気が少し和んだ。

第六訓　びっくり発言は驚くものだ。（後書き）

どうでしたか？

次あたりで・・・ツラと辰馬を出そうかな？

高杉はまだあとになりそう・・・。

感想もよろしくお願いします。

第七訓 人の家で争うな！（前書き）

第七訓です。

辰馬、桂、陸奥の初登場。

第七訓 人の家で争うな！

「で、その神威って奴はどういう奴ですかイ？」

万事屋内では真選組が居座っている。

「バカ兄貴は・・・強い奴を殺すことしか考えてない奴ネ。親だろ
うが妹だろうが手に掛ける奴アル。」

そう言う神楽は少し寂しそうだ。

「仕方ないんじゃないの。それが夜兎の本能。強き者の血を求め、
血のために生きる一族なんだよ。それが、夜兎なんだよ。」

柚兎はあっさりそう告げた。

「ゆずっちは・・・夜兎の本能が目覚めたことってあるアルカ？」

神楽は怯えたような眼を見せている。

「あるよ。」

柚兎は笑顔を崩さず言った。

「攘夷戦争の時になんども。」

周りの人は黙ってしまった。
その時だった。

ガラガラララ。

「銀時!!」

長髪が目立つ男が入ってきた。
そう桂 小太郎だ。

「桂あああ!」

沖田が叫んだ。

「おい、銀時。なんで真選組が居る?」

「桂ああああ!」

「いい加減にしろ。人んちで何やってんだ?」

銀時が声をあげた。

「よお、ヅラ。久しぶり。」

桂が顔を上げた。

「あつ、柚兔!?! 貴様なんで居る?」

「居候してる。」

柚兔は笑顔で言った。

「つーかヅラ。お前何の用?」

銀時はヅラに聞いた。

「高杉のこと『ドガアーアーン』・・・ってなんだ？」

いきなり大きな音が屋根からした。

銀時らが上を向くとそこには見慣れた船が突っ込んでいた。

真選組が驚いた顔を上に向けている。

「アハハハハ。すまんのー金時。屋根壊してしもーた。」

銀時は眉間にしわを寄せた。

そこに居たのは無論いつものトラブルメーカー坂本 辰馬だ。

「辰馬！！お前は何度、人の家を壊したら気がすむ。しかも金時じゃない銀時だ。」

「坂本！！」 「辰馬！！」

桂と柚兔が同時に叫んだ。

「お、ヅラに柚兔がが？久しぶりじゃのー。」

真選組はいきなりやってきたモジャモジャ天パに驚いた顔を見せている。

「おい、万事屋。コイツ誰だ？」

土方が聞いた。

「ああ。坂本 辰馬。快援隊の隊長だよ。」

「えー！！コイツが坂本 辰馬？」

真選組がさらに驚きの顔を見せた。

その時、辰馬の横から拳がとんできて、辰馬の顔面に当たった。

「ぐはっ。」

全員がその方向を向く。

「おまんらすまんの。頭が迷惑かけてスマンきに。」

一人の女がそう言った。
陸奥だ。

「すいませーん。」

玄関から女の声が聞こえた。

その声を聞き近藤が思いつきり反応した。

第七訓 人の家で争うな！（後書き）

どうでしたか？

辰馬はまた家を破壊しました。

ヅラはヅラだね。

感想よろしくお願いします。

第八訓 笑顔にも種類がある（前書き）

第八訓です。

今回はお妙さんがやってきて・・・
大変なことに・・・。

第八訓 笑顔にも種類がある

「お妙さ〜ん!!」

近藤が来訪した女に飛びつく。
それをあっさりとぶん殴る。

「ぐあああああ!!」

そして近藤が吹っ飛ぶ。

「近藤さん、いい加減にしてください。あの世に逝かせますよ。」

お妙が笑顔を崩さず言った。

「そう、銀さん。依頼持ってきたわよ。」

銀時たちが眼を光らせている。

「1日キャバ嬢の仕事手伝って。ここの居る人にも手伝ってもらおうかしら。」

全員の眼から光が消えた。

逆らっても無駄ということは十分承知している。

「じゃあ、銀さんと新ちゃん、神楽ちゃん、沖田さん、山崎さん、ウザイ長髪の人、オレンジの長髪の人、笠をかぶった女の人はキャバ嬢。」

「姉上。あのなんでキャバ嬢なんかに？」

新八が恐る恐る聞いた。

「すまいるわね、年末年始も営業するのよ。でもね、キャバ嬢が旅行とかで減ってしまつて・・・それで思いついたの。銀さんたちにお問い合わせすればいいんだって。」

お妙はニコニコ言った。

「あの、男も紛れているんですけど・・・。」

「いいじゃない。数が足りれば。」

（よくそんなこと言えるな・・・）

「仕方ないひと肌脱いでやろう。」

桂が言った。

「あの・・・わしもキャバ嬢になるがか？」

男勝りの陸奥が言った。

「そうよ。いいじゃないキャバ嬢ぐらい。」

反抗できない微笑を顔につけてお妙は言った。

「あとは・・・近藤さんとモジヤモジヤは雑用係。土方さんはスツタフで。」

（この笑顔には反抗できないんだよな・・・。）

「ってことでいきますよ。」

そしてやってきたスナックすまいる。

「おりようちゃん。」

辰馬がおりようのもとに走り出す。
それをお妙が引っ張る。

「坂本さん。あなたの仕事はあっちよ。」

その笑顔にさすがのKYの辰馬も顔を引きつった。

「さあ。銀さんたちも着替えてきて。」

お妙に引っ張られ銀時たちも着替えにいく。

出てきた銀時たちを見てお妙がびっくりする。

「なかなか似合ってるわね。」

沖田と柚兎と山崎と陸奥はなかなか似合っている。

神楽は前よりマシになっている。

銀時とツラと新八は似合うも女ぽくない。

「柚兎オメー……。女じゃねえーか……。」

「銀時……お前はなんかヤダ。」

柚兎は笑顔で言った。

「ヤダとはなんだ？」

「簡単に言うとかヤダ。」

また笑顔で言った。

「簡単に言ってねえよ。」

「柚兎、俺はどうだ？」

ヅラが聞く。

「うーんキモイ。」

またもや笑顔で言う。

「柚兎・・・キモイとはなんだ？」

「だーから。キモイ。」

ヅラは少しショックだったらしく壁の方でへこんでいる。

「ま、キモイの当たり前ですぜイ。」

沖田はヅラの姿を見て言った。

山崎も引いている。

「どこがキモイのだ。」

「全部じゃき。」

陸奥が表情を変えずに言った。

「ま、べつにいいアルヨ。キモイのは元からアル。」

「リーダー、それはないだろ。」

「いいアル。失うものなんてないでしょ。」

毒舌の神楽。

「あるよ。俺の何か失うよ。」

「口げんかしないで準備してね？殺すよ。」

お妙が言う。

「銀時なんか聞こえるぞ。お妙さんの口からとてつもない言葉が聞こえるぞ……。」

柚兔が始めて引きつった笑顔を見せた。

「聞き流せ……。つつこんだら殺されるぞ……。」

銀時も顔を引きつらせている。

「じゃあ。はやく準備してね。」

「はい……。」

第八訓 笑顔にも種類がある（後書き）

どうでしたか？

銀時たちのキャバ嬢姿はというと。

銀時・・・いつものパー子

ヅラ・・・いつものヅラ子

神楽・・・吉原の時みたいの一つのお団子

新八・・・いつものパチ恵

柚兎・・・髪をほどいた感じ

沖田・・・前髪をあげて、髪を二つにしている

山崎・・・髪を二つ

陸奥・・・髪をポニーテール

沖田って縛れるほど髪あるのかな？

感想よろしくお願いします。

第九訓 兄弟って似るもんだ（前書き）

第九訓です。

オリキャラ二人目だすよ!!

第九訓 兄弟って似るもんだ

「やっと終わったー!!」

店が開いてから約5時間。

銀時たちはキャバ嬢の仕事を手伝いなんとか終わった。

「客にもキモイ言われた・・・。」

ヅラは壁にくっついてへこたれている。

「情けねえーな、ヅラ。」

銀時が言った。

「旦那も人のこと言えないじゃねえーですかイ。」

「んなことねえーよ。」

銀時が反論した。

「アハハハハ。嘘はよくないき。」

「辰馬、黙れ。」

「お前らはいつまでたっても・・・変わんないね。」

柚兔が笑顔で言った。

その後、ヅラと別れた万事屋一行と辰馬と陸奥に真選組は万事屋へと足を進めた。

「で、なんでオメーらもついてくんの?」

「一応警察なんでな。」

近藤はそう言い豪快に笑った。

「はい。そうですね。」

万事屋の方へ近づくと一人の青年が立っていることに気づく。

青年はこっちの方を見た。

暗く顔まではよく見えなかったが、真選組は驚いた。

どこか高杉に似ているところがあつたからだ。

「よお、銀時、辰馬、柚兔。」

真選組は刀に手をかけたが、銀時たちが驚かないところを見て刀から手を放した。

「なんでこうも久しぶりの人がやって来んのかな？てか、なんでもここが分かった？」

銀時は青年に対して、警戒せずに聞いた。

「坂田 銀時って人知ってる？って聞いて、ここを教えてもらった。」

青年もあっさり答える。

「おい、万事屋。知り合いか？」

土方が聞く。

「ああ。攘夷戦争よりも前からの友人だよ。」

銀時が答えた。

「じゃあコイツも攘夷戦争に・・・。」

「まあな。ま、いったん入るか。ここじゃさみーしよ。」

そう言い銀時は青年を手招きして中へは行って行った。

その後ろに真選組や辰馬たちが続く。

中に入って明るいところで見た青年は高杉にそっくりだった。
髪の色は紫で三日月の模様が描かれている赤い着物を着ていて、赤い眼をしている。

「自己紹介ぐらいしろよ。」

銀時が青年に言った。

「へえーい。俺、高杉 晋次。高杉 晋助の弟で23歳。」

「おとうとおお!？」

真選組が声をあげた。

新八も神楽も驚いている。

「そう、眼の色以外と性格以外はそっくりだよ。」

銀時が言った。

そして晋次に向かって言った。

「で、何の用？」

晋次は一瞬顔を曇らせたが、真面目な顔になって言った。

「兄貴をどうにかしてくれ!!」

銀時と辰馬は顔を見合わせた。

「ヅラにも会いたかったんだけど、どこに居るか分かんねえし・
・だから銀時・・

兄貴を・・なんとかしてくれよ!!」

銀時はため息をついて言った。

「はあ。アイツのことをなんとかしてって言われてもよ・・今の高杉を引きずり出すのは・・無理に近いと思うぜ・・。」

「それは・・そうだけど・・。でも、兄貴が復讐しようとしたって・・先生はそんな事望んでねえんだ!!」

晋次は真剣な声で言った。

「ま、俺も少しは力になってやるよ。お前に任せたってお前弱いだろ? すぐ死んじゃうしよ。」

真選組は呆然としていた。

辰馬はニコニコ笑っているし、柚兎もにやって笑っている。神楽と新八は啞然としている。

「じゃ、ヅラにも頼んで、高杉の居場所でも探してもらおうわ。」
「よろしく頼むな、銀時。」

第九訓 兄弟って似るもんだ（後書き）

どうでしたか？

ここでオリキャラ紹介ぱーと1

伊達 柚兎・・・25歳の175？。6月20日生まれ。

戦場の獅子と呼ばれた攘夷戦争の時に銀時らに並

ぶく

らい有名な攘夷志士。

夜兎と人のハーフ。

髪の色はオレンジで眼の色は青。

第十訓 確信はちゃんと理由がある（前書き）

第十訓です。

またオリキヤラ出ます。

そして・・・高杉初登場です。

第十訓 確信はちゃんと理由がある

「晋助ィー。」

江戸のどこかにある船では一人の少年が声を上げた。
真っ黒な髪に、真っ黒な目の少年だ。

「おう。ちゃんと斬ってきたか？」

冷たい声が響いた。

「うん。ちゃんと斬ったよお。」

子供っぽい声だがその頬には返り血が付いている。

「はあー。元志は色々恐いっスよね。」

女性の声も響いた。

「そお？」

元志と呼ばれた少年は藤原 元志。
歳は14歳。

「いつか俺も元志と戦いたいなあー。」

「団長、やめときな。」

また子供っぽい声が響いた。

「ククク……。これからどうなのか楽しみだ。」

冷たい声の主は冷たい笑顔を顔に張り付け言った。
元志は笑顔だ。

次の日の夜……。

真選組の屯所では土方、近藤、沖田が話している。

「また辻斬りかよ……。」

「高杉の仕業ですかねィ？」

昨日の夜、巷で辻斬りが発生。

そのことについて話しているようだ。

「どうだかな。だが可能性としては高いぞ。トシ、警戒を強めろ。」

「おう、近藤さん。」

ドンドン。

真選組に来訪者。

「誰だ？」

近藤たちがドアを開けるとそこに居たのは……。

「万事屋……。」

「よお、昨日ぶりだな。」

銀時が言った。

「オメーら何の用だ？」

「いやー晋次が用があるってよ……。」

すると、銀時の後ろから晋次が姿を現した。

「あの、昨日の……辻斬りの件で……。」

真選組が顔を見合わせた。

その後、銀時たちを中に引き入れた。

「で、辻斬りがどうした？」

晋次は確信をもったように言った。

「たぶん、あの辻斬りは……兄貴の鬼兵隊の仕業です。」

真選組は驚いた顔見せている。

「おい。なんで確信できる。」

土方が鋭い声で聞いた。

「それは、俺が説明します。」

柚兔が言った。

「昨日の夜……すごい殺気がしたんです。その殺気が……高杉の殺気にそっくりだったんです。」

「おい、なんでお前殺気が分かるんだ？」

柚兎は笑顔で言った。

「夜兎は殺気に反応できるんです。」

その時だった。

柚兎が顔を曇らせた。

「どうした？」

「この殺気だ……。こっちに来てる。」

全員が驚いた顔をしている。

ドン！！

真選組の扉が開いた。

「さあーて。ひと暴れますか。」

第十訓 確信はちゃんと理由がある（後書き）

どうでしたか？

オリキヤラ紹介ばーと2

高杉 晋次・・・23歳の身長165cm。10月8日。

攘夷戦争では鬼兵隊の副官だった。

高杉の実の弟。

性格は高杉の反対で口数が多く、おおらかで、明るい。

そして、少しSまじり。

見た目は高杉に似ている。

眼の色は赤、髪の色は紫。

服は三日月模様の入った赤の着もの。

感想よろしくお願いします。

第十一訓 場の空気に合わせろ（前書き）

第十一訓です。

過激化したよ。

苦手な方は見ない方がいいかも・・・。

でも・・・題名どおりろくなことねえーよ。

あいつら来るよ。

どうすんだよ。

第十一訓 場の空気に合わせろ

「さあーて、ひと暴れますかあ。」

一人の少年が入ってきた。

真選組の見張りが少年の方へ突っ込む。

「もう邪魔だよお。」

そう言い刀に手を当てた。

そして一瞬で真選組の見張りの人から血が飛んだ。

ドタツ。

「なんだあゝ。その程度お。」

そう言うと少年は奥の方へ歩いて行った。

そこに、不運の山崎が通った。

「さあーて。やっちゃおう。」

そう言うとなんの躊躇いもなく刀を抜いた。

山崎は震えて入るが、やっぱり真選組。

ちゃんと刀は抜いている。

「あれれ、反抗しちゃうのお。」

少年は刀を振り下ろした。

ガキイイイ。

振り下ろした刀は刀によって止められていた。いつの間にか山崎の持っていた刀が止めた人の手に握られている。

「晋次・・・くん・・・。」

山崎が震える声で言った。

奥から近藤たちや銀時たちもやってきた。

そこに居る少年の近くに居る倒れている真選組を見て顔が驚いている。

「へえゝ。君が晋助の弟？」

柚兎や銀時が驚いた顔をしている。

「お前、なんで兄貴を知っている。」

晋次が言った。

「だって俺。晋助が率いる鬼兵隊の隊員だよお。」

それを聞き、真選組も驚いた顔をしている。

「俺、藤原 元志。」

元志はニコニコして言った。

「さあーて、殺しちゃおうかな？」

元志は刀に力を込めた。

「ぐっ。」

晋次もありったけの力で抑えている。
すると、いきなり元志が力を弱めた。

「うわっ!!」

「隙ありィ!!」

元志は刀を振り下ろした。

「なんてな。」

晋次はすぐ体制を立て直した。
そして、刀をかわした。

「ありゃなかなかやるねえ。」

タッ。

「で、元志だっけ？」

「うん。そうだよお。」

子供声で言った。

「お前、兄貴に何頼まれた？」

晋次の眼は怒りが混じっているようだ。

「教えないなあ。」

挑発するような言い方。

その様子を見る銀時、新八、神楽、柚兔、近藤、土方、沖田。
それに、震えてる山崎。

「局長・・・奥・・・行った・・・方が良くないですか？俺付いて
いきますから・・・。」

「ついでに土方さんもあの世に行った方がいいんじゃないですかイ
？」

「オメーは黙ってろ。」

その様子に眉をびくびく震わせながら呆れ顔をする晋次。

「あの～。こっち緊張状態なんですけど・・・完ぺきに場を壊さ
ないで下さいよ。」

あきれた様子で言う晋次。

「テメー、一人だけで緊張してろよ。」

だるそうに言う銀時。

「銀時、後で殺す！！」

晋次が怒る。

「あの～俺のこと忘れてない？」

さっきからほったらかしの柚兔がやっと口を開いた。

「お前・・・山崎より、影が薄くなってねえ。」
「今回、活躍してるよ俺。」

山崎が屁理屈を言う。

「まあ、いつもよりな・・・。」
「つか・・・俺のことほとっかないでよお。」

イライラしている元志。
そんな場になぜか二人の男が乱入。

「アハハハハ。」

そんな声に即効つつこむ新八。

「坂本さんなんているんですか？一番場の雰囲気壊してますよ。」
「そうがか？」

自覚していない辰馬。

「ダメだーこの人。いつまでたってもバカなまんまだ。」
「しかたなろう。それがコイツだ。」

それにつっこむ晋次。

「ヅラー。お前なんで居んの？」
「ヅラじゃない、桂だ。」
「かーっーらー！！」

沖田の手にはバズーカが。

そこへ、刀を振り上げる元志。

ドガン。

2つの音が重なり合う。

「うわっと。」

桂と晋次が同時に声を上げる。

真選組VS桂の戦いが勃発！！

その奥では、晋次VS元志！！

「死ねー！！桂。」

「桂じゃない、ヅラだ。あつ、間違えた・・・。」

「どんな間違えですか？桂さん。」

晋次たちはというと・・・。

「うらあー！！！」

「チッ、あたあー！！！」

血だらけになりながら戦う二人。

シリアスとボケが綺麗に絡み合っている。

その様子を暇そうに見る万事屋。

だが、それは・・・一瞬で壊れる。

ドオン。ドオン。

「なんだあ？」

音がした方を見ると黄色頭の女（高杉バカ）とロリコン男（自称フエミニスト）それに、音楽バカ（人斬りね、この人）の3人が。

「なっ、鬼兵隊!？」

驚きの声を上げる近藤。
そして・・・。

ドォーン。

神楽はそれをかわす。

「あれれ。前より強くなってるね、神楽。」

「バカ兄貴イイイイ!!」

神威はニコニコしている。

「おいガキ。なんでお前まで居る？」

銀時はだるそうに言った。

「お兄さん、ちゃんと生きてた。エライ、エライ。」

「ガキに言われたくねえーよ。」

すると・・・。

「ガキじゃない、桂だ。」

桂が乗ってきた。

「オメーじゃねえよ。つーか何乗ってんだ？」

銀時はやつぱりダルそうだ。

「アハハハハハハ。」

「辰馬、黙ってろ。」

柚兔がつっこむ。

そして、奥の晋次と元志は・・・。

「ハア、ハア、ハア。いい加減にしてくんない？」

血だらけになった晋次が言う。

「君こそ・・・いい加減にしろよお。ハア、ハア、ハア。」

同じくらい血だらけの元志。

つまり五分五分ということだろう。

「おい、晋次。大丈夫か？」

柚兔が言った。

「うるさい。ちょい黙ってて。」

そう言う晋次は元志の方へ走っていく。

「トラアアアアア!!」

「ウリヤアアアアア!」

ガキイイイイイイン。

「だーかーらー。もうやめにしようや。」

「そっちこそお。」

そこへ・・・。

一人の声が響く。

「おい。元志、お前にしちゃ珍しいじゃねえーか。」

冷たい声・・・。

「兄貴・・・。」

第十一訓 場の空気に合わせろ（後書き）

どうでしたか？

ここで・・・。

オリキャラ紹介ぱーと3

藤原 元志・・・14歳の170cm。7月6日生まれ。

高杉の右腕。

愛称は「人斬りげん」

子供なくせにすごく強い。

ただ、高杉よりは弱いらしい。

黒髪に黒目。

感想もよろしくお願いします。

第十二訓 怪我をしたら無理をするな（前書き）

第十二訓です。

ちよいとグロイかも・・・。

第十二訓 怪我をしたら無理をするな

「兄貴・・・・・・・・。」

晋次は呟いた。

全員が声をした方向に目を向ける。

「高杉イイイイイイ！！！」

銀時と桂が同時に声を上げる。

「ククク……。久しぶりだな、銀時にヅラ。」

「ヅラじゃない、桂だ。」

真選組は呆然としている。

「晋助イ。君の弟、強いよお。」

元志が血をポタポタ垂らしながら言った。

「ククク……。テメエにしちゃ珍しいじゃねえーか。」

その様子を見る、晋次。

「オメーら、いったん退くぞ。」

高杉がそう告げると、また子たちも後に続いた。

「おい！高杉イ！！。」

銀時が怒りが混じった声で言った。
高杉は振り返ると、一言告げた。

「止めたいなら、近いうちにターミナルへ来い。」

そう言い、屯所から去って行った。

その様子を立つのもやっとな晋次が見ている。

その様子に気づいた銀時たちが駆け寄る。

「おい、晋次。大丈夫か？」

「ハア、ハア、ハア。平気、平気・・・。」

笑顔で言っているが、いつ倒れてもおかしくない状態だ。

「大丈夫に見えねえーよ。」

それでも無理に笑顔でいる晋次を辰馬が背負う。

「ちょい、辰馬。痛っ。」

「無理するじゃなか。」

そこへ、陸奥がやってきた。

「坂本。ってなにかあったがか？」

「まあ、色々とな。」

銀時が言う。

そのまま一行は屯所の中に入っていく。

そして、桂は仕方なく中へ入れる。

「痛い！！痛いつて、ヅラ。」

「我慢しろ。そして、ヅラじゃない、桂だ。」

包帯やらをまかれている晋次。

「で、お前らはどうすんだ？」

土方の声で周りが静かになる。

「俺は、兄貴を止める。絶対止めてやる！！」

先に静寂を破ったのは晋次だ。

「なんで、お前は・・・そこまで・・・？」

土方が聞く。

「なんでかな？自分でもよく分かんないけど、元の兄貴に戻って欲しいからかも。」

そんな、晋次の言葉を聞き神楽が下を向く。

「私も行くアル。神威を止めるアル。上、止めんのが下の役目ネ。」

新八も言う。

「僕も行きます。神楽ちゃんたちを護るために行きます。」

銀時、桂、辰馬、柚兎も顔を見合わせたが答えた。

「ま、行くしかねえーよな。」

「その通りだ。」

「何とかするき。」

「晋助、止めれんの俺らしいねえーしな。」

真選組は呆れた顔をしたが、笑った。

「お前らしいな。」

「じゃあ、行きますか。」

晋次が元氣よく言った。

「待て、お前はここに居ろ。」

銀時が言った。

「えっ、なんで？」

「当たり前だろ。その怪我でどうするっていうんだ。」

桂が言った。

「仕方ねえーな・・・。」

晋次は納得した。

「じゃあ、明日行くから。税金泥棒、晋次のこと頼むな。」

銀時が言った。

「押し付ける気かよ……。まあ、頼まれてやる。」
「万事屋。お前ら今日は泊っていけ。」

近藤が言った。

「いいのか？」

「ああ。」

そう言い万事屋一行はここに泊ることになったのだ。
全員が寝た後、晋次は布団から出た。
そのまま、屋根の上に行く。

（星が綺麗だな。そういや……。あんとときも屋根の上で兄貴たちと一緒に星を見たっけ。）

『兄貴。あの星何て言うの？』

『しらねえーよ。』

『じゃあヅラは知ってる？』

『知らないよ。そして、ヅラじゃない、桂だ。』

『銀時は？』

『俺が知ってたら奇跡に近いって。』

（あん時はまだ先生も居たよな……。）

『あの星は北極星ですよ。年中位置が変わらないんですよ。』

『あつ、先生。』

『そろそろ、中に入りましょう。風邪引きますよ。』

『はい。』

（もう、あの頃には戻れないのかな・・・。）

「そんなところで何してるんでイ？」

声がした。

晋次は振り返る。

「あつ、沖田・・・。痛つ。」

「あんまり、無理しない方がいいですぜイ。」

そう言うのと晋次の隣にやってきた。

「何考えててたんですかイ？」

「色々、昔のことをね・・・。」

寂しそうな笑顔で言った。

「俺も旦那たちの昔を知りたいですぜイ。」

沖田が興味津津な顔で聞いてくる。

「じゃあ、少しだけ話すかア。」

第十二訓 怪我をしたら無理をするな（後書き）

どうでしたか？

次から過去篇でいきます。

感想よろしくお願いします。

第十三訓 昔話（前書き）

第十三訓です。

少しずつ明らかになる4人の過去・・・。

第十三訓 昔話

「過去なんて言っちゃあれだけど・・・俺らの昔話をするにあたって忘れちゃいけない人が居る。俺たちの先生、吉田 松陽だ。」

その話を真剣に聞く沖田。

「俺らが先生に会ったのは・・・俺が2歳で、兄貴が4歳のときなんだ。」

『兄貴、寒いよ。』

『我慢できるか？雪もあと少しでやむからよ。』

二人の子供が雪の降る中を歩いている。

雪は段々強くなっている。

『本当にやむの？』

『大丈夫、大丈夫。』

弟と思われる子を懸命に慰める兄。

そんな、二人の前に現れたのは一人の大人だ。

『大丈夫ですか？』

自分たちよりかなり年上な大人を見て二人は不安そうな顔をする。

『震えることはないんですよ。なんで、子供のあなたがたがこんな雪の中を歩いているんですか？』

優しい声に兄の方が口を開いた。

『俺たち・・・お母さんが死んで・・・行く場所が亡くなって・・・それで、それで・・・家を飛び出して・・・雪の中を歩いていたんだ。』

兄は泣きながら言った。

『私のところへ来ませんか？』

大人は優しい声で言った。

『いいの？』

子供たちは不安そうな顔で言った。

『はい。私は吉田 松陽と言います。あなた方は？』

『俺、高杉 晋助。歳は4で誕生日は8月10日だ。』

兄が先に言った。

『僕、高杉 晋次。2歳。10月8日生まれ。』

弟は不安が和らいだらしく笑顔で言った。

『じゃあ二人ともおいでなさい。』

松陽はそう言い、歩いて行った。

二人もその後続く。

松陽の家に着くと一人の少年が待っていた。

『先生、お帰りなさい。』

自分たちより年上と思われる少年が笑顔で言った。
少年は女顔で、真っ黒な髪が綺麗だった。

『小太郎、家族が増えましたよ。挨拶してくださいね。』

先生の声に小太郎はその後ろに居る子供に自分の名前を言う。

『俺、桂 小太郎。歳は5歳だ。』

そして、ニコツと笑う。

『俺、高杉 晋助。歳は4だ。』

『僕、高杉 晋次。歳は2。』

二人の姿を見て、小太郎は言った。

『紫の髪かぁ。綺麗だね。』

そう言う小太郎の姿を笑顔で見る二人の子供。
その後はすぐ打ち解け、仲良く遊んでいる。

そして、それから1カ月。

松陽が一人の子供を連れてきた。

『先生、おかえり。』

晋次と晋助、小太郎が笑顔で言った。

『また、家族が増えましたよ。』

3人は先生の後ろに居る子に目を向ける。
その子は銀髪で赤い眼をした子だった。

『俺、桂 小太郎。』

『俺、高杉 晋助。』

『僕、高杉 晋次。』

3人は自分の名前を言った。

『俺……。坂田 銀時……。』

銀時は不安そうな声で言った。

『銀時の眼、僕と一緒に。』

晋次は笑顔で言った。

『じゃあ、お風呂に入ろうか。』

松陽はそう言い、お風呂の準備をしに行った。

『銀時、怯えることはないんだよ。』

小太郎が優しく言った。

それを見た銀時はぱーっと笑顔になった。

『ヤバー。かわいい!!』

小太郎のテンションはどんどんおかしくなっていく。

『ヅラ 小太郎。』

銀時が呟いた。

・
・
・
・
・
・

『ヅラじゃない、桂だ。』

それを見た晋次と晋助はお腹を押さえて笑った。

『ヅラだって、ヅラ。』

『お前、髪長かったけどヅラだったんだな。』

晋次と晋助が言う。

『ヅラじゃない、地毛だぞ。』

小太郎が言った。

『ヅラ、ヅラ、ヅラ、ヅラ。』

晋次と晋助は笑いが止まらなくなっている。

『晋次、晋助。いい加減にしようよ。』

そんなことがあり4人はすぐ仲良くなった。

「まあ、そんなことがあったんだよ。」

晋次が呟いた。

「小さい頃は高杉もかわいいですねィ。」

晋次が寂しそうな笑顔で言う。

「兄貴は弟バカだから・・・。」

「晋次はだから、戻って欲しいんかい？」

「昔は嫌だったけど、今は懐かしいよ。そういうのって亡くなってから重大さに気付くんだよね。」

沖田はそのことよく知っている。

ミツバが居なくなったら・・・なんとも言えない悲しさが残っているから。

「俺も分かりますぜィ。」

その言葉を聞き晋次は笑顔になった。

「そう言えば・・・あの副長いじめたら楽しそうだな。」

「おっ、分かっているじゃないですかィ。」

沖田も笑顔で言った。

「じゃあ、俺ももう寝ますよ。」

沖田はそう言い屋根から飛び降りた。

その後ろ姿を見ながら、晋次は別のことを考えた。

（俺らはあの時に戻れるのだろうか……。先生が居たところに。辰馬や柚兎と会った時に。）

「先生、俺はどうしたらいいのかな？」

その様子を柱の陰で見っていた土方がやってきた。

「なんか、悩んでいるようだな。」

「土方……。」

土方は聞いてきた。

「お前らの先生は今居ないんだろ……。それが、お前らが攘夷に参加した理由か？」

それに、驚いた顔を見せた。

「良く分かりましたね……。そのことは……。いつか話しますよ。」

そう言うとき晋次は屋根から降り、屯所の方へ入って行った。

第十三訓 昔話（後書き）

どうでしたか？

次回は・・・とうとうターミナルへ・・・。

そして、戦いが勃発！？

感想よろしくお願いします。

第十四訓 祭り好きと運動会好き

「じゃ、行ってくる。」

次の朝、銀時たちはターミナルへ行く。

「万事屋、気をつけろよ。」

近藤が言った。

「分かってるって。晋次のこと頼んだよ。」

銀時はそう言うと、桂、辰馬、新八、神楽、柚兔を引きつれて行った。

「あっそうじゃ。陸奥のことも頼んだぜよ。」

辰馬は振り返ってそう言った。
そして、後を追う。

「土方さん、昨日の夜の話し聞いていましたよねィ？」

沖田が言った。

「なんで分かった。」

「なんとなくですぜィ。」

沖田が言った。

その後、三人は屯所に入って行った。

「晋次。見送んなくて良かったのか？」

土方が言った。

「別にいいんですよ。あいつらは絶対、兄貴を止められますから……」

晋次はニコニコしながら言った。

その様子を隣で無表情で見る陸奥。

ただ、どこか心配そうな顔をしている。

「陸奥は辰馬のこと心配？」

晋次が聞く。

「そんなことないぜよ。坂本は負けることはないき。」

陸奥は確信を持つように言った。

その二人の様子を見て、真選組は部屋を後にした。

「陸奥どうする？」

晋次が聞く。

「行くぜよ。やっぱり近くに居たいき。」

陸奥はそう言った。

晋次はすぐさまいつもの着ものに着替える。

「じゃあ行くよ。」

二人は布団の下に隠した靴をはき、窓から飛び降りた。
そして、ターミナルの方向へ走る。

「あつ。ちよつと待って。」

晋次は急にそう言っ、方向を変えた。

「どこにいくがか？」

「ちよつとね・・・。」

晋次は神社に入っ、行き、草むらから一つの刀を取り出した。

「それは、なにがか？」

陸奥が聞く。

「攘夷戦争の時に使った刀。紅椿って言うブランドものだよ。」

晋次はニコニコしながら言っ、帯に刀をさした。

そして二人はターミナルの方向へ走る。

そのターミナルでは・・・。

「ヅラ、辰馬、柚兎、新八、神楽行くぞ。」
「おう！！！！」

6人はターミナルへ入って行った。

そして、階段を使い屋上へ向けて走る。

2階からは、鬼兵隊やら春雨の下っ端がやってきて戦闘状態に。

「クッソ。らちが明かねえ。」

銀時が言う。

そして、2階、3階、4階、5階、6階、を過ぎ、7階へ。

「待ってたよ。」

そこに居たのはニコニコ笑顔の神威だ。

「銀ちゃん、先に行くアル。」

神楽が言った。

「おい、神楽。お前一人を残せねえーって。」

銀時が言った。

「じゃあ、俺も残るから先に行ってよ銀時。」

柚兔が笑顔で言った。

「わ、分かった。すぐに追いついてこいよ……。」

銀時たちは上の階へ走る。

「俺、アンタと戦いたかったんだよね。」

神威が言った。

「俺もだよ。」

柚兔も笑顔で言う。

「兄貴をぶっ倒すアル。」

戦闘が始まった。

その上の階では・・・。

「よお、アンちゃん達。」

阿伏兔が居た。

「銀さん。こいつは僕がやります。」

新八は決意のこもった眼で言った。

「新八。死ぬんじゃないよ。」

「はい!!」

銀時たち3人は上へと上がって行く。
その上では・・・。

「この先は通さないっす。」

「お前たちのロックを聞かせるでござる。」
「フェミニストパワーです。」

また子、河上、武市の3人が。

「わしは、その姉ちゃんをやるき。」

「俺はそのロリコン男。」

「俺あ河上だな。」

戦闘がどこの階でも始まった。

そして、屋上では……。

「ククク……。どんな祭りが見れんのか楽しみだよ。なあ元志。」

高杉が冷たい声で言った。

「そうかなあ。俺は祭りより運動会が好きだよお。」

元志が明るい声で言った。

「そういう意味じゃないですよ。元志くん。」

女の声。

のぶタスこと今井 信女。

そしてその横には……。

佐々木 異三郎。

「ククク……。さあーてどんなことになんだろおな。」

第十四訓 祭り好きと運動会好き（後書き）

どうでしたか？

次回の見どころは・・・神威VS神楽、柚兔かな？

感想よろしくお願いします。

第十五訓 無理しすぎは良くない（前書き）

第十五訓です。

どうぞ！！

第十五訓 無理しすぎは良くない

「ハア、ハア、ハア、ハア。つ、着いた。痛っ。」

晋次は大量に汗を流しながら言った。

「おい、晋次。無理するじゃなか。」

陸奥が心配そうな声で言った。

「大丈夫。傷が開いてきているだけだから……。」

だが、辛そうに顔をしかめている。

一方、真選組の屯所では……。

「晋次ら……抜け出しやがった。」

そう言うとは真選組はターミナルへ走った。

ターミナル前。

「あっ!!」

真選組が到着。

「はぁ。お前らな……。」

土方が呆れ顔をしている。

だが、晋次の方を見て顔を曇らせる。

「晋次、大丈夫か？」

「大丈夫。ハア、ハア、ハア。」

手で腹を押さえながら言った。

晋次はそのまま中へ入って行った。

「おい、待て。」

土方たちが止めようとした時、上から男女の二人組が降りてきた。

「お、おまえらは・・・。」

土方たちが驚いた顔をする。

「また、あなたたちと戦えるとは奇遇ですね。」

佐々木が言った。

「人斬りの眼の男の子よ。さあ殺りましょう。」

信女も言った。

「まさか、見廻り組が手を結んでるとは・・・。」

近藤が口を開けた。

「近藤さん行ってくれ。／行ってくだせエ。」

沖田と土方が同時にしゃべった。

「こいつらは俺らがやりますんでえ。」

「近藤さんは晋次を頼む。」

そして、二人は刀を抜いた。

その様子を遠くから見つめる陸奥。

近藤も中へ入って行く。

「なんだ。その程度。」

7階では神威が笑顔で言っている。

ただ、頬も腹も斬れている。

「黙りなよ、ガキ。」

同じく笑顔な柚兔。

そして、柚兔が刀を握った。

神威も構えた。

「トラアアアアア!!」

「ホアタアアアアア!!」

ドガン。

柚兔が体制を崩した。

「隙あり!!」

神威が手を振った。

（かわせない……。）

柚兎は目をつぶった。

ドガン。

「柚っちイイイイ!!」

神楽が叫んだ。

（手ごたえがない……。）

「ハア、ハア、ハア、ハア。柚兎……大丈夫か。」

柚兎が眼を開けると晋次が居た。

「おい、晋次何やってんだ。」

柚兎がどなった。

「大体、立ってんのもやっとな体のくせして……。」

「大丈夫だから……。大丈夫だよ。」

だが、誰が見てもそれはカラ元気にしか見えなかった。

「お前なあ……。」

柚兔が呆れる風に言った。

「うーん、俺飽きちゃった。」

神威はそう言うと、去って行った。

「神威イイイイ。待つアル。」

神楽が追いかける。

「乗れ。」

「ふえ？」

晋次が間抜けな声を出した。

「背負ってやる。」

そう言うのと柚兔は晋次を背中に乗せた。
そのまま、神楽の後を追った。

そして、他の所でも・・・。
決着はついていた。

「銀時イ。」

「銀ちゃん。」

「銀さん。」

他の人も銀時のところへやってきた。
銀時は柚兔を見て驚いた顔をしている。

「晋次……。なんで来んの。」

全員が晋次を見る。

「俺だって、なんかやりたいんだ。」

晋次は決意のこもった眼で言った。

「仕方ねえーな。行くぞ……。屋上へ!!」

第十五訓 無理しすぎは良くない（後書き）

どうでしたか？

戦闘シーンが書きずらかったため飛ばしました。
でも次の話に入れます。

次回は・・・神威VS神楽、柚兔

元志VS晋次

晋助VS銀時

第十六訓 最終決戦。(前書き)

第十六訓です。

戦闘シーンが苦手なため・・・。

残念な出来です・・・。

第十六訓 最終決戦。

「来たな……。」

高杉が呟く。

「高杉、決着をつけようぜ。」

銀時が言う。

その様子を心配そうに見る神楽と新八。

「神楽。お前は……神威と決着付けて来い。晋次もそのガキと決着付けろ。」

銀時が言った。

「銀ちゃん……。」

「ヅラ、新八、辰馬、柚兔。お前らは戦ってる奴らのサポートだ。」
「おう。」

その4人が返事をした。

「さあーて、最終決戦だ。」

晋次も柚兔の背から降り、刀を抜いた。

「兄貴、行くアルヨ。」

「さあーて、決着をつけようぜ。人斬りさんよ。」

晋次の眼は真剣だった。

「分かったあ。さあーて行くぞお。」

元志が地面を蹴った。

そして、刀振り下ろした。

ガキイイイイイン。

「ぐっ・・・。」

「晋次さーん!!」

新八が叫んだ。

「大丈夫だ。」

晋次が言った。

神楽VS神威も死闘となっている。

「ほあちやああああ!!」

ドゴーン。

「銀時ィ。お前、腕落ちたな。」

「黙っとけや。」

ガキイイイイイ。

「うわっ。」

晋次の声が響いた。

「ハア、ハア、ハア。ぐっ……。」「
晋次！！」

桂たちが叫んだ。

「大丈夫。大丈夫……。」

晋次が言った。

「テリヤアアアアア！！」

晋次が走る。

元志も身構える。

ガキイイイイイイ。

「次で終わりとしよーや。」

元志が言った。

「ああ。」

晋次も短く返事をする。
どっちも刀を構えた。

そして、一斉に走り出した。

シャン。

ドタッ。

どっちも同時に倒れた。

「ハア、ハア、ハア、ハア。」

「まさか、相撃ちとはねえ。」

元志が呟いた。

「ハア、ハア、ハア。こっちが・・・驚きだよ。」

晋次も呟いた。

銀時たちの方では・・・。

「ハア、ハア、ハア。」

「ククク・・・。晋次があそこまで強くなってるなんてな・・・。」

高杉が呟いた。

「俺らもそろそろ終わらせよーぜ。」

銀時が言った。

「ああ・・・。」

二人は走り出した。

ガキイイイイイイン。

ズド。

高杉の刀がとんだ。

「晋助ィ!!」

元志が叫んだ。

銀時は刀が構えた。

だが、刺さる刺さらないくらいで刀を止めた。

「俺って甘いな……。」

「ククク……。甘いものばかり食べてるからだ。」

高杉はそう言って、懷から短刀を取り出した。

そして、鞘から抜いた。

「銀時!!」

辰馬たちが叫んだ。

高杉は銀時に刺そうとする。

「兄貴やめろおっ!!」

晋次が叫んだ。

そこで、刀が止まった

「俺も甘い男らしいな……。」

「元からだろうが……。」

銀時が呟いた。

「晋次に感謝するんだな……。」

高杉が小さな声で言った。

「ブラコンはかわんねえーな、高杉。」

銀時は呟いた。

「黙れ、天パ。」

「黙れ、低杉。」

そんな二人を見て、桂と辰馬はニヤついた。

新八はどうしたらいいかつという反応をしている。

「やっぱ、俺……先生の仇は無理らしいな……。」

高杉は空を見上げた。

曇天の空を……。

銀時も桂も黙っている。

神威も神楽も柚兎も手を止めている。

「そんなことないよ!!」

第十六訓 最終決戦。(後書き)

どうでしたか？

そろそろ終わりそうです・・・。

小説の題・・・全然なぞってない・・・。

感想よろしくお願いします。

第十七訓 心からの叫びは心に届く。(前書き)

第十七訓です。

週間アクセスが500超えました。

そのため・・・続編を出したいと思えます。

詳細は後がきにて。

第十七訓 心からの叫びは心に届く。

「そんなことないよ!!」

晋次の声が響いた。

全員が晋次の方を見る。

「兄貴は・・・仇・・・とれるよ。ヅラだって、銀時だって・・・俺だって・・・手伝うから。」

晋次は真剣だった。

「だから・・・一人でため込まないでよ。あの時のことは俺ら全員のことなんだよ。だから・・・一人でため込む必要なんて全然ねえーんだよ。」

晋次は刀を杖にして立ちあがった。
その頬に一筋の涙がこぼれた。

「晋次・・・。」

銀時たちが呟いた。

高杉はいつものように薄い笑みがこぼれている。

そこへ、真選組と陸奥がやってきた。

沖田と土方は血だらけだ。

「神威・・・。私はお前のこと兄だと思ってるアル。お前はどっ思ってるアルカ？」

神楽が言った。

「さあーな。ま、妹とは思ってるよ。」

神威は一言そう言い、笑顔を見せた。

「兄貴……。これからどうすんだ……。？」

晋次が言った。

「知らねえーよ。ただお前と元志の怪我が治ったら……。いや、なんでもねえー……。？」

「なんだよ……。？」

晋次はそう言うと、笑顔を見せた。

ただ、その後は貧血か気を失った。

晋次の体をキャッチする銀時。

その横には同じく気を失っている元志が。

「銀時ィ。」

「なんだ？」

高杉の声に簡単に返事をする銀時。

「その二人……。病院にでも連れてってやってくれ……。」

「ああ。」

そう言うのと背を向けて歩き出した。

銀時たちはその背を見ながら高杉に何かが通じたと確信した。

「あつ、もうひとつ。その二人が起きたら言っといてくれ・・・見舞行くて。」

高杉は振り返るとそれだけ告げてまた歩き出した。
その後ろに神威たちが続く。

「銀時、これでよかったのか？」

桂が口を開いた。

「ああ、良かったに決まってるだろ。あんな高杉を見たのは攘夷戦争以来だよ。」

銀時が笑顔で言った。

神楽もいつもより笑顔だ。

銀時は晋次を背負い、桂が元志を背負った。

「さーて、病院に直行だな・・・。」

銀時たちはそう言い、歩いて行った。

その後ろに真選組が続く。

曇りの空から一瞬、日が見えた。

第十七訓 心からの叫びは心に届く。(後書き)

どうでしたか？

では続編の詳細を・・・。

タイトルは・・・銀魂 過去の世界へ。

タイムトラベルで攻めます。

この事件から1カ月。

銀時、ツラ、辰馬、高杉、柚兔、神威、晋次、元志が・・・
タイムトラベル。

その先は・・・銀時たちの子供時代など・・・。
どうなるようになる？

感想お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5184z/>

夜兎と人の血

2011年12月27日22時51分発行